

「出雲方言と石見方言の境界域調査」のための 予備調査結果の分析とその方法の検討(2)

山下 由紀恵¹ 高橋 純²
(¹保育学科 ²総合文化学科)

The Analysis of a Pilot Survey of the Borders between Izumo-and Iwami-Dialects in Shimane and
the Investigation of the Suevey Method (2)

Yukie YAMASHITA, Jun TAKAHASHI

キーワード：言語発達 Language Development
方言 Dialect 学前児 Preschool Children

1. 目的

本研究ノートでは、「出雲方言と石見方言の境界域調査」のための予備調査結果の分析とその方法の検討(1)」(高橋, 2013)で示された言語研究の方法において、就学前児の方言を採集することの意義についてまとめる。

2. 方言発話の開始年齢

言語発達の開始時期には、1歳半から2歳にかけて電文体発話と呼ばれる語連鎖のパターンが出演する時期があり、この時期には、助詞、助動詞、あるいは連結詞、英語では冠詞などがしばしば省かれるのが特徴である。「トータン ネンネ」は叙述に不可欠な語のみで構成されるため、「お父さんが寝ている」の意味か、「お父さんが寝る」の意味かは、文脈に完全に依存して解釈する。このような状況依存の初期の電文体発話は二語以上で構成され、日本語以外でも多くの言語において出現することがわかっている。

一つの文に含まれる語(ないし文節)の数は着実に増加し、2歳過ぎのボキャブラリー・スパートと呼ばれる時期をすぎると、語彙数のみならず、文節数が増加し、3歳児では、一文中の文節数がだいたい2～3、4歳児ではだいたい3から4になることがわかっている(大久保, 1973)。この文節出現の時期に、動詞での方言獲得が可能となると思われる。江端(1984)は、2歳から3歳の双生児の約1万2000枚カードの言語記録をもとに、「動詞(連用形) + トル(チョル)」という方言アスペクトが2歳半頃から使用されたと報告している。

例1：M児(2歳4ヶ月)(江端, 1984)

父○頭が アセッポイ ネー。
頭髪が汗っぱいねー。
M○アシェガ デチョルー。
汗が出ている。

例2-1: M児 (2歳5ヶ月)

M○ネーチャン コーヤッテ ノンドル ネー。
姉ちゃんはこうやって飲んでるね。

例2-2: A児 (2歳5ヶ月)

母○ナニ シテル ノ。
何をしているの?
A○ダッコ シトル ノ。
だっこをしているのよ。

また、将然動詞のアスペクトとして動詞に「オル」などが下接して、「将に～するところだった」の意を表すという。

(一)「動詞(連用形)+ヨル」

例3-1: M児 (2歳7ヵ月)

M○オチョッタ。
もう少しで落ちるところだった。

例3-2: M児 (2歳4ヵ月)

M○コレモ タビョールノ ノ。
これ食べているの? (食べていいの?)

例3-3: M児 (2歳7ヵ月)

M○アー コロビョッター。
あっ ころびそうだった。

(二)「動詞(連用形)+ソーナ」

例3-4: M児 (2歳4ヵ月)

M○オチソーナ。
落ちそうだ。

この江端の事例は、大久保(1973)に基づく一般的な文節の発達からすると、やや発達が早いと思われるが、このような文末動詞の方言アスペクトは、一般でも3歳には獲得されると考えられる。

3. 方言と標準語の使い分け

現代の社会的言語環境では、方言を話す話者とのみ接することは不可能で、絵本・テレビ・ビデオ等を通して音で共通語(標準語)アスペクトも獲得されると思われる。子どもは、身近な方言発話と共通語発話をどのように使い分けているのだろうか。

加用ほか(1996)は、ごっこ遊びで子どもが方言

と共通語をどう使い分けるか、福井市、京都市、大阪市、鹿児島市4府県の公私立保育園3~5歳児クラスの自由遊びでの発話記録(発言総数1,815)から分析している。結果的に、言語形式別に見て、発言数のうち方言の比率は、3歳児クラス47%、4歳児クラス54%、5歳児クラス33%であった。次に、発言内容カテゴリーをごっこ遊びの「セリフ」とそれ以外にわけている。セリフ以外の発言とは、ごっこの段取りなど進行のための発言を含みこれを「枠発言」と呼んでいる。またごっこのレベルを超えた仲間入りや抗議のような交渉もあり、これを「外発言」としている。「枠発言」「外発言」を含む現実世界での発言を「現実発言」として、ごっこの「セリフ」、現実発言の「枠発言」「外発言」、さらに「混合発言」の4分類で方言比率を分析している。

その結果、3歳児・4歳児・5歳児ともに、「セリフ」では圧倒的に方言を上回って共通語が使われるのに対して、「枠発言」「外発言」など現実の交渉時には方言が共通語を上回って使用されることがわかった。共通語アスペクトは、架空の世界のお話を聞く際に獲得するため、幼児期のごっこの中でも、架空の「セリフ」では共通語を使用する可能性が高まると思われる。

例4-1: 3歳児歯医者さんごっこの「セリフ」指導の例:(可用, 1996)

客の子が来るが、『『あーん、歯医者さん、まだ閉まってる』、なの!』と中の子に言われる。

しばし待ってから「ピンポーン。」中の子が「違うでえ、あや(自分)がやんねんでえ」と怒り出す。

例4-2: 5歳児のセリフによるごっこ遊び:(可用1996)

(ピンポーンと言って観察者が家族ごっこの中に入る)

姉:「はい、何でしょうか」

(えっと、遊びに来ました)

母「まあ、あなたは隣の山田さんじゃないですか」(山田さんです)

母「まあ、お、ひ、さ、し、ぶり」

・ ・

姉「あのね、このお姉ちゃん(観察者のこと)、あのね、カメラマンだから、いつもカセットもってるの(テープレコーダーを見て)

(うん、そうなの)

母「そうなのお(明らかにセリフ調)

姉「北村先生だってカメラマンやってんで」

母「そうや、キャッツの時カメラマンやってんで」

このような方言と共通語の使い分けは、幼児期を過ぎると、さらに一般的に公共の場で強まると思われる。茂呂(2001)は、山形県庄内地方の小学校で1時間授業の文字化資料をすべて対象に、方言レジスターと共通語レジスターを、子どもたちがどのように使い分けるか分析している。茂呂の分析では、このデータで子どもが方言を使用したのは1回の発言のみで、集団的自由発話から「発表」へ移行したときに、方言から共通語レジスターに移行が重なっている。

例5：事例57番(茂呂, 2001)

51教師 M君どおげだっけ

52M君 おさえっけ

53教師 おさえっけ

54R子 んでの おしての:はずえそうなの:したさこうなって こげしてや あ(笑い)

55子どもたち (小声でくちぐちに意見を述べる)

・ ・

63教師 誰か手え挙げていってくんねんかなあ

64R子 いで 顔面さあだあっていで

65教師 はい 手をあげていう

66Y子R子(挙手)

67教師 Y子さんと R子さんと どうぞ はい Y子さん

68Y子 顔に雪があたって 冷たくていたいです

69教師 冷たくていたいっていったけの:はい R子さん

70R子 あんまり冷たすぎて何か感じなくなってしま

71教師 ああ: それ そういうふうになったことある

教師の側の方言レジスターは、むしろ子どもたちの集団的自由発話のきっかけとなり、その開始に寄与していた。教室という公共の場では、できるだけ共通語を使用し、自由で個人的な場での方言使用との社会的場面の違いを作り出している。このことから、加用(1996)が示したような幼児期の「ごっこ」遊びの「セリフ」の後、学校では公共の場の共通語レジスターが働き、ほとんど方言は授業中使用されなくなると思われる。これは、一般に「話しことば」と「書きことば」といわれている二種類の言葉の使い分けに近いが、岡本(1982)は、子どもの話しことばに、幼児期の「一次のことば」と児童期以降の標準語使用を分け、書きことばを含む後者を「二次のことば」と呼んでいる。

4. 方言を使用しやすい年齢

以上の研究群から、子どもの発達過程で方言研究をするには、年齢的には3歳以上から可能であるが、「場面」の影響が強く、どのような場面設定で収集された発言記録であるかによって、方言比率はかなり異なると思われる。

幼児期の子どもの言語獲得で方言を定量的に分析したものは少ないが、さらに発達段階をすべて追跡的に網羅した研究は、数少ない。日本語圏ではないが、Holweggen&Holweggen(2010)は、アメリカ英語圏でのアフリカ系アメリカ英語の特殊性が、どのように変化するか、17年間縦断的に調査した貴重な研究を報告している。

彼らは32名のアフリカ系アメリカ人の言語データを生後48か月、第1学年(6歳)、第4学年(9歳)、第6学年(11歳)、第8学年(13歳)、第10学年(15歳)と縦断的に追跡し、方言的要素を持つアフリカ系アメリカ英語(AAE)の使用が、減少したり上昇したりまた減少したりといった、周期的なパターンを描くことを発見している。

生後48か月(4歳)の段階は小学校に上がってからよりも方言使用は多く、むしろ小学校第1学年か

ら第4学年にかけて、方言使用量は減少するという。この発見は、上記の可用(1996) 茂呂(2001)の示した、方言と共通語の使い分けがこの時期に進み、公共性のない方言について小学生が学校で使用を抑制すると考えると、日本語圏にもあてはまることと思われる。このころに、子どもたちはより標準的な言語、日本語では共通語、アメリカでは標準的なアメリカ英語に適應する。

最も方言使用量の平均値が高くなるのは第6学年から第8学年にかけて(11歳から13歳にかけて)であるが、この時期は個人差が大きい。また会話の中でアフリカ系アメリカ英語が増加し、高校生になる頃に再び減少するという。

小学校以降に標準的な言語学習の発達段階があることをこの研究は示しているが、同じような方言の発達の周期が日本語にもあるとするなら、小学生を対象とする学校等の公の機関を通じた言語記録の収集は、最も方言比率が低く、中学生では個人差が大きくなることから、標準的な方言会話を収集するには、就学前の幼年期が最も安定していることがわかる。

以上の関連諸研究より、「出雲方言と石見方言の境界域調査」のための予備調査結果の分析とその方法の検討(1)」(高橋, 2013)で示された言語研究の方法においては、言語獲得期の3歳以上の就学前に、できるだけ「セリフ」「発表」に相当する発語ではなく、社会的交渉と私的場面での説明等の、可用(1996)に示された「粹発言」「外発言」に相当

する発言場面で、方言を収集することが必要と思われる。保育所の設定保育時間等をはずした自由遊び場面で、少人数の子ども同士のリラックスした交渉を基本としつつ、誰もがよくわかっていることについて叙述を求める方法が、最も適していると思われる。

引用文献

- 江端義夫 幼児期における方言動詞アスペクトの形成-2, 3歳時期双生児のばあい- 方言研究年報Vol.26 81-102.
- 岡本夏木(1982) 子どもとことば 岩波書店
- 可用文男ほか(1996) ごっこにおける言語行為の発達の分析-方言と共通語の使い分けに着眼して- 心理科学第18巻第2号 38-59.
- 高橋純(2013) 「出雲方言と石見方言の境界域調査」のための予備調査結果の分析とその方法の検討(1)」 島根県立大学短期大学部松江キャンパス紀要Vol.6 63-72.
- Hofwegen J.& .Hofwegen W.(2010) Coming of age in African American English: A longitudinal study. *Journal of Sociolinguistics* Vol.14 No.4 427-455
- 茂呂雄二(2001) 方言-共通語音声の違いに関する幼児のメタ認知の獲得過程からみた言語発達プロセス 平成11年度12年後科学研究費補助金(基盤研究C) 研究成果報告書

(受付 平成24年11月1日, 受理 平成24年12月3日)